

兵庫県豊岡市／コウノトリと共に生きる —環境と経済の「共鳴」をめざして—

豊岡市長

中貝 宗治

中貝 宗治（なかがい むねはる）

1954年生まれ。兵庫県豊岡市出身。兵庫県職員、兵庫県議会議員を経て2001年より豊岡市長。著書に『鶴（こうのとりの）飛ぶ夢』（2000年）。

多彩な豊岡の顔

司会 環境と地域社会と経済が共鳴しあうことによって持続可能な社会をめざす。コウノトリと共に生きていくことをコンセプトに、兵庫県豊岡市が多様なかたちで展開されている試みについて、市長自身の声で聴かせていただきたいと思います。

中貝 皆さん、こんにちは。豊岡におけるコウノトリをめぐる取り組みをお話して、少しでも皆さんのご参考になればと願っております。

豊岡は兵庫県の北部、日本海に面した町です。2005年の合併で、今の面積と人口になりました。人口約8万9000人の町です。築89年という市役所があり、もうシーズンは終わりましたが、ズワイガニ、豊岡は津居山ガニと呼び、松葉ガニと呼ばれることもあります。越前地域で揚がりますと、越前ガニと呼ばれているカニが名物で、大変おいしいカニです。

玄武洞というのは豊岡にあります。柱の形をした美しい造形美で、地球科学上、世界的な大発見がされた場所です。160万年前にマグマが吹き出てきて、固まってできたのが玄

武洞です。ちなみに玄武岩というのは玄武洞にある岩ということで玄武岩と名前がつけました。

地球は大きな磁石です。高温の物質、たとえば鉄のようなものが冷めて、ある温度を過ぎると、周辺の磁石の影響を受けて、それ自体が磁石になります。ここは160万年前の地球の南北を覚えて今に眠っている場所ですが、昭和のはじめに京都大学の松山基範教授がその磁石の方向を調べたところ、驚くなかれ、今の地球と全く南北が逆転をしている。「逆磁極」と言われていますが、それが世界で初めて発見された場所です。その後、同様の現象が世界中で発見され、地球の南北は何十万年から何百万年ごとに変わっていくことがわかっています。

その発見が端著になって海洋底拡大説というものが論証されます。それは今のプレートテクトニクス、地球の表面は大きな岩の板を何枚か組みあわせてできていて、太平洋の底は太平洋プレートという大きな岩の板で毎年10cmずつ日本の方向に向かって進んできています。そして日本海溝で沈み込んでいてズルッとといった時に大地震が起きるわけです。地球科学上、今では常識になってい

ますが、それが正しいということが最初に発見されたのが、この豊岡の玄武洞です。その玄武岩のキャラクターの「玄さん」は豊岡市の職員がデザインしたもので、観光客がいない時にはシュンとするというので、人気を博しています。

城崎温泉 / 美しい海浜 / 出石皿そば等々

城崎温泉は合併によって豊岡市になりました。日本では極めて稀な木造3階建ての町並みが残されている温泉街です。竹野には「快水浴場百選」や「日本の渚百選」に選ばれた非常に美しい浜があります。青井浜では、ワンワンビーチという、犬専用のビーチがあり、しかもワンちゃんは上がってくると温泉に入ることができます。神鍋高原がある日高町も豊岡です。2万年前に噴火した火山で、現在は活動していませんが、スキー場として利用されています。小京都と呼ばれる出石も豊岡にあります。江戸時代の城下町で、現在でも当時の情緒をのこす町です。そばを小さいお皿に盛った「出石皿そば」を目当てに年間70万～80万人のお客さんがくるといって、そばで町おこしをした町です。

その出石に近畿地方で最後といわれる芝居小屋があります。1901年（明治31年）につくられた芝居小屋で45年前に閉館されていました。それをそっくりそのまま復元しました。全部部材を外しまして、腐ってしまって使い物にならないところだけ新しい部材を入れて、再度組み立てました。看板も45年前の看板そのままです。一昨年、歌舞伎でこけら落としをいたしました。近い距離で観客は役者を見られ、役者にとっても大変人気のある芝居小屋でございます。

関西どぶろく特区第1号でもあります。つ

くるそばから売れていく、どぶろくでございます。農家民宿もございます。またぜひお越しいただきたいと思います。

円山川が育む自然と産業

豊岡は町の真ん中を円山川がゆったりと流れています。河口から10km上流でカレイやアジが釣れます。円山川の河川勾配は1万分の1です。10km上流にあって高低差はわずか1m。100m水平方向にあって高低差は1cm。ほとんど水平状態の川です。したがって川底には海の水が忍び込んできて、海の魚が釣れる日本では稀な川です。風がない時には鏡の面のように美しい水面をしています。

ところが河川勾配が極端に小さいということは水はけの悪さを意味します。2004年10月20日、豊岡は台風23号で泥の海に沈みました。大雨が降ると水浸しになりやすい場所、低湿地帯といいますが、人間が住む上で結構やっかいな場所です。

ところが低湿地帯や湿地が大好きな生き物がたくさんいます。低湿地帯、湿地が大好きな豊岡の生き物の代表例を二つごらんいただきます。コリヤナギという種類の柳です。円山川の氾濫がもたらす湿地に自生しています。これを使ってできたのが柳行李です。

江戸時代、豊岡は柳行李の日本最大の産地でありました。生活様式の変化にあわせて、鞆に変わりました。豊岡は革を除くと日本の生産の7割を占める日本最大の鞆の産地になっています。豊岡でデザインされ、豊岡でつくられた鞆は、2009年に世界のプロダクトデザイン賞の最高峰といわれているiFデザイン賞をとりました。日本では他にレクサスがこの賞をとっています。今年3月、フラン

ス・バリの見本市に持っていったところ世界中から100社以上のオファーが来たそうです。

平成14（2002）年には、雅子さまと愛子さまが、豊岡でつくられた柳のバスケットを使われている写真も出ました。円山川があり、豊岡盆地があり、それがしばしば氾濫によって湿地化をして柳が生え、柳による産業が生まれ、そして鞆へと変わる。その地の自然が、その地の産業を育てる一つの典型例です。

コウノトリの絶滅から野生化まで

もう一つ湿地が大好きな生き物の代表例がコウノトリです。羽を広げると2mもある白い大きな鳥です。かつては日本の至るところで見られる鳥でした。里山の大きな松の上に巣をつくって周辺の田んぼや川の浅瀬で餌をとっていました。カエルやナマズ、ドジョウ、フナを好む完全肉食の鳥です。

今でこそ田んぼは機械が入りやすいように、必要な時以外は乾いた田んぼになっています。ところがちょっと前までの豊岡の田んぼ、日本の至るところの田んぼは水路と田んぼとの境が判然としない、1年中水浸しの田んぼがたくさんありました。それを土地改良によって機械化を進めていったわけです。水浸しの田んぼには、1年中カエルやナマズ、ドジョウ、フナがいます。コウノトリにとってはかっこうの餌場でありました。

ところが明治期になり、鉄砲が解禁されてハンティングでコウノトリが数を減らします。第二次世界大戦中には、松の根っこから油をとるために大量に松林が伐採され、ねぐらを追われます。最後は戦後の環境破壊で数を減らしていき、39年前の1971年、野性の

最後の1羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめを刺したのは農薬です。

この絶滅の前にコウノトリを守ろうという運動が豊岡で起きて、1965年に飛んでいた鳥を捕まえて豊岡で人工飼育が始まります。24年間、来る年も来る年も1羽の雛も孵りませんでした。絶望もありました。批判もありました。コウノトリが増えていくという確信を誰も持たないまま、まるで暗闇の中を黙々と歩くように人工飼育が続けられていきます。

転機は1985年に起きます。ロシア・ハバロフスクから6羽の幼いコウノトリが豊岡に贈られてきたのです。当時、兵庫県から飼育を任されていた豊岡市役所の職員が懸命に育ててカップルができて、1989年（平成元年）、人工飼育の開始から実に25年目の春、待望の雛が誕生いたします。そして22年連続で雛が孵って、今、144羽のコウノトリが豊岡に暮らしています。そのうち38羽のコウノトリが再び自由に空を飛び、さらに4羽のコウノトリが人工巣塔の巣の中でスクスクと育っています。野性での絶滅から39年、人工飼育の開始から45年、豊岡でコウノトリの保護活動が明確な形をとって55年になります。長い時間と膨大なエネルギー、そしてたくさんのお金が必要でした。これからもおそらくそうだろうと思います。

コウノトリとの3つの約束

なぜそれほどまでにして豊岡はコウノトリを空に帰そうとするのか。狙いは大きく3つあります。

一つは人間とコウノトリとの約束を守ろうということです。45年前、飛んでいた鳥

を捕まえて鳥籠に入れました。安全な餌を与えていって、いつか増えたらまた空に帰すということを当時の人々は誓いました。当時の人々はコウノトリと約束をしたんです。私たちは約束を果たしてもう一度、コウノトリを本来の場所に帰さなければなりません。これが一つ目です。

二つ目は、絶滅寸前の野性生物の保護に関して世界的な貢献をしようというものです。極東のコウノトリ、くちばしの黒いコウノトリは世界あわせてもせいぜい3000～4000羽だと言われており、絶滅寸前の鳥です。その鳥の保護に関して世界的な貢献をしようというものです。ヨーロッパにはくちばしの赤いコウノトリがいます。シュバシコウといわれるコウノトリですが、こちらは80万羽以上いると言われていまして問題はありません。しかし極東のコウノトリは絶滅寸前です。

3つ目、今度は観点を変えてコウノトリも住める環境とはどういう環境なのかということにかかわります。コウノトリは完全肉食の大型の鳥です。あんな鳥でも、また野性で暮らすことができるようになりますとすると、そこには膨大な量のたくさんの種類の生き物が存在するはずで、そのような豊かな自然は人間にとってもすばらしい自然なのではないか。

もう一つあります。どんなに自然が豊かになって餌が豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃つ、そういう文化のところにコウノトリが暮らすことはできません。あんな鳥が近くにいてもいいよね、というおらかな文化が人間の側になければなりません。そこで「コウノトリを空に帰そう」を合言葉に、コウノトリも住める豊かな環境をつくろう。この環境というのは自然環境であ

り、そして文化環境でもあります。さらに言えば、実は自然を元に戻すということは、お金も労力もかかります。そのところにわざわざかけて自然再生をやるかどうかというのは実は価値の問題ですので、環境ということの背景には文化の問題があります。

これらを実現するために、さまざまな努力がなされました。1999年に兵庫県は豊岡市に50万坪(155ha)の用地を求めて県立コウノトリの郷公園をつくり、その中に県立大学の研究所をおき、教授以下一講座をおいて野性化の研究と実験が進められています。その公園の一角をお借りして豊岡市立コウノトリ文化館を設置しています。これがなぜコウノトリ科学館ではなく、コウノトリ自然館でもなく、コウノトリ文化館なのか。その理由は、いまのべたことから理解していただいたと思います。間近でコウノトリをごらんいただくことができます。

ビオトープ。ビオはバイオ、生き物。トープは場所。生き物が住む場所です。たくさんの休耕田があります。農家の方をお願いをして1年中、水を張っていただいて、草の管理をしていただきます。生き物が湧いてきます。豊岡の自然は豊かになり、同時にコウノトリの餌場になります。こうした水田が豊岡市内に10haあります。

豊岡では6月頃、中干しといって一度田んぼから水を全部抜きます。その時に、田んぼの中のオタマジャクシは大量に干からびて死にます。とりわけトノサマガエル、アマガエルです。中干しを1カ月ずらしていただくをお願いしました。この間にオタマジャクシはカエルになります。その後に水がなくなっても、どこへでも逃げていくことができます。アカガエルは2,3月頃に卵を産みます。ところがこの時期には田んぼに水がありま

せん。アカガエルを増やすことができないか。そこで冬に水を張っていただいて、アカガエルの産卵場を増やしていただきました。こういうことでカエルは増えてまいりました。それによってヘビも増えて、コウノトリの餌になる。このような水田が市内に72haあります。

また、田んぼの水はけをよくするために水田と水路に落差をつくった結果、生き物の循環が途切れてしまいました。田んぼの水はあたたかいので心地がいい。流れがないのでタマゴや稚魚にとっては極めて安全な場所です。しかし、水はけがよくなったことで行き来ができなくなってしまう。そこで兵庫県土地改良事務所の人たちが水田魚道をつくりました。水田魚道は果たして役に立つのかについては、中干しの時に水田魚道を使って逃げてきたドジョウを一網打尽にした写真を見るとわかるように、ドジョウ以外にもさまざまな生き物が水田魚道を使って行き来していることがこれまでの調査がわかっています。市内に110カ所あります。費用は豊岡市と兵庫県が折半しています。

コウノトリの郷公園に入ってくる進入路には電柱があって電線がありました。コウノトリを放鳥した時に電線に引っかかって死んだら大変だと、そこで電柱を抜き電線類は地下に入れました。そうして、美しい農村景観が再現されました。

コウノトリが人間の営みを変える

市長公用車ですが、ここにもコウノトリ。全但バス、民間のバスもコウノトリ。飛行機にもコウノトリ。コウノトリのミュージカルもできました。コウノトリの神社もあります。久々比神社の「久々比」とは「くちなわ

食い」、朽ちた蛇を食べる、コウノトリのことです。ちゃんとお守りと絵馬もあります。

こういう活動をやる時に大切なことは、知に訴え、情に訴えることです。こういう努力を積み重ねてきて、2005年（平成17年）9月にコウノトリ未来・国際かいぎが豊岡で開かれ、その日の午後、続々と人々がコウノトリの郷公園にやってきました。そして放鳥の歴史的瞬間がやってまいります。

この時に野性での絶滅から34年が経過していました。最初の1羽が飛んだ時、「やった！」と、大きな声がしました。それは私の声でした。その2年後、2007年5月20日、日本の野外で43年ぶりに雛が孵り、46年ぶりに巣立っていきました。その後もさまざまな努力が進められています。円山川にある、ひのそ島が水はけを悪くしておりました。水はけをよくするために全島掘削の計画がありました。しかし自然保護も大切だ、治水もしなければいけない。そこで話し合いがなされて、半分だけ掘削がなされました。こちらの半分は底まで掘削されて、残りも水面近くのところまで掘削がなされました。16万㎡あった島は半分になり、コウノトリが餌場として利用するようになりました。

河川敷内での自然再生を進めておりまして、これまでに円山川の河川敷の湿地が128ha増えています。今もこの作業は進んでいます。戸島という地域の田んぼです。城崎温泉のすぐ近くの、田植えをしようと足を入れるとズブズブと沈んで膝までいってしまうような大変な湿田でありました。そんな田植えは大変な重労働でした。なぜか夫殺しと言わずに、嫁殺しの田んぼといわれておりました。こんな田んぼは嫌だということで、乾いた田んぼにする土地改良の工事が始まりました。その工事の順番を待っている間、休

耕田にしていたところ、2005年夏に絶滅危惧種のミズアオイが、一斉に花を咲かせました。

2005年夏、この場所に野性のコウノトリが毎日のようにやってきて、餌をとるようになりました。サギの餌を横取りしようとして失敗した写真です。放置しておきますと工事が進んで、この美しい光景は未来永劫失われてしまいます。守れないかという声が市民から上がりました。そこで豊岡市が約4ha、甲子園球場のアーナ面積くらいですが、豊岡市が農家から確保して、兵庫県と豊岡市で工事の分担をして湿地公園にいたしました。

この野性のコウノトリは、大陸からきたコウノトリですが、8月5日に来たところからハチゴロウという名前で親しまれていました。ハチゴロウがこの場所の大切さを教えてくれた。その感謝の気持ちを未来永劫伝えるために豊岡市は条例上、正式にこの湿地の名前を「ハチゴロウの戸島湿地」と名付けました。この場所では3年連続、雛が孵って、今年も昨日2羽の雛がこの場所から巣立っていきました。

日本海、円山川、城崎温泉、ハチゴロウの湿地。海のすぐ近くであり、城崎温泉のすぐそばです。空から見た写真、日本海、円山川、城崎温泉がここです。ハチゴロウの戸島湿地はこの場所です。線で囲っている場所をラムサール条約に登録しようと運動しています。ラムサール条約は国際的に重要な湿地を保全しようという条約で、2012年、ラムサール条約第11回締約国会議（COP11）がルーマニアであります。その時の登録をめざしています。環境省からの依頼により、その条約を担当する部署に市の職員を4月から派遣して準備をしております。

出石川、円山川の支流ですが、河川敷の田

んぼが堤外湿地になっていまして、全面買収を国交省がいたしました。買収は全部終わり、湿地に戻す工事が始まっています。コウノトリの餌場にしようという狙いです。自然再生のために国土交通省が用地を買うというのは日本でも初めての事です。

50年前の1960年に豊岡市内で撮られた写真には、朝、子どもたちが田んぼ道を学校に行こうとする中、2羽のコウノトリがいて、あたかも「いってらっしゃい」といわんばかりに子どもたちを見送っています。50年近くたって2006年の写真には、またその光景が豊岡に戻ってきました。

遠隔地をつなぐコウノトリ

今年のトピックスはこれです。豊岡にある自動車教習所の正面玄関の電柱の上にコウノトリが巣をつくり、ここで1羽の雛が育っています。よくこんなところに巣をつくるものだと思いますが、とうとう人間の方が根負けをしまして関西電力はこの電柱に電気を送ることを止めています。

コウノトリは幼い頃は大変な冒険家でありまして、日本各地に飛んで行きます。豊岡を出て愛媛県西予市に行き、今は福井県越前市にあります。越前市の皆さんも大変喜びまして、最近、「越ちゃん」という特別住民票を出してくれました。もう1羽は豊岡を出て、一度奈良県生駒郡安堵町に飛び、愛媛県の今治に行っています。上郡町まで帰って、また四国に行き、一度帰ってきたのですが、神戸に飛びまして、また四国に行き、たつの市、加賀市、新潟、そして岩手の陸前高田に行って、今、大崎市、3万～5万羽のマガンがやってくるころの湿地の地帯にいま、居ついています。こういうことがずいぶん起こるよ

うになってまいりました。

環境と経済の共生をめざす

豊岡には環境経済戦略があります。環境と経済の関係には、さまざまなものがあります。一方は環境を徹底的に破壊しながら経済が発展する関係があります。かつての日本の公害がそうでした。他方の極には、今度は環境を守るために経済に徹底的に制約を与える。そういう関係もあります。

そのどちらでもない、環境をよくすることによって経済が活性化をする。環境をよくして儲かるなら、もっと環境をよくして、もっと儲けようと欲が湧いて経済の誘因となって、環境をよくする行動、環境行動がさらに広がる。環境と経済が共鳴する関係を私たちは「環境経済」と名付けて、それを豊岡に広げていく活動を進めてまいりました。

その狙いは3つあります。一つは持続可能性です。環境行動自体の持続可能性です。環境をよくする行動がいいということは頭ではわかります。でも長続きしません。元アメリカ副大統領のアル・ゴアさんの映画『不都合な真実』を観て「地球温暖化問題は大変だ、家に帰ったら小まめに電気を消そう」と思っても3日と長続きしません。しかし環境をよくする行動は長く続かないといけません。仲間を増やさないといけません。そのためには経済で裏打ちされることが有効である。その実績を示していきます。

二つ目は自立です。私たちの暮らしも財政も経済が支えています。したがって経済を元気にしなければ自立をはかることはできません。今、どのような分野ならば日本の片田舎の豊岡で経済活性化の可能性が残されているのか考えたとき、環境分野だということ

です。

最後は誇りです。もし豊岡が環境破壊によってではなく、環境をよくすることによって生計を成り立たせているという町をつくることができれば、私たちは自分たちの地域を大いに誇りに思うことができるだろうと思います。日本の地方が衰退していった過程は、実は地方の人々が自分自身の地域に誇りを失っていった過程と全く一緒でした。私たちはもう一度、誇りを取り戻して、まちづくりへのエネルギーにつなげていかなければなりません。これは豊岡だけのことではありません。もし日本が環境をよくすることによって経済を活性化させていく、そういう国になることができれば、私たちは自分の国を世界に対して誇ることはできるはずだと思います。

環境と経済の共鳴のイメージとしては、環境により取り組みを進めると経済が活性化し、利益が出る。もっと儲けようということと環境をよくする行動はさらに広がる。さらに経済効果が出る。また環境がよくなって経済がさらによくなるということです。2003年に「環境と経済の共鳴をめざす」と宣言をし、2004年度に「環境経済戦略」をまとめました。オバマさんが大統領になった時、グリーン・ニューディールと言いはじめましたが、やっと豊岡に迫りついてきたと、豊岡では言っております。

環境経済戦略—5つの柱

そして、環境経済戦略の5つの柱を立てました。

環境経済型企業の集積を図ることが一つ目。二つ目は自然エネルギーの利用を進める。三つ目は豊岡型の環境創造型農業を広げ

る。自然はその地域によって違いますので、その地にあった環境創造型農業を広げなければいけませんので「豊岡型」とつけています。四つ目は豊岡型の地産地消。そして、コウトリリズム。この5つの柱を立て、具体例を積み重ねる努力をしまりました。

豊岡にカネカソーラーテックという太陽電池をつくる企業があります。その大半はヨーロッパに輸出されています。世界中の人々が地球温暖化対策に貢献しようとして太陽電池を買って設置すればするほど、CO₂は減ります。その企業は儲かり、その利益を利用してさらに開発がなされ、より安価により高効率の太陽電池ができます。そして市の税収も増えます。環境と経済は矛盾しないという一つの典型例です。豊岡産の太陽電池はドイツにも設置されました。この不景気の中にも100億円増資し、生産能力を2倍にする工事が完成しております。

豊岡の廃タイヤ対策も考えています。廃タイヤをドーナツ状に積み重ねてそれを水平に並べて地面の中に壁をつくります。タイヤがない時は振動源から遠ざかれば遠ざかるほど振動は徐々に下がっていきませんが、土の中にタイヤの壁をつくる工法をしますと、振動は見事に素早く減衰をします。

すでに大阪府でこの工法が採用されました。軟弱地盤でモノレール地震のような振動にいつも苦しめられている地域がありました。振動を遮断する方法はありませんでしたが、この工法をとり入れることで振動は50%カットされました。

廃タイヤ対策というごみ対策、環境行動が振動を減衰させ、企業の利益につながる。環境と経済の共鳴の二つ目の例です。

3つ目。神鍋の山の中で炭焼きをしている

企業があります。窯の中で木が燃えて炭になると炭だしという作業をします。半日仕事で大変な作業です。しかもものすごく熱い。この企業は省力化を考え、市の補助金も得ました。実に簡単なことでした。トロッコの中に木を入れて、窯の中にいれます。炭が出来上がるとレールの上に乗ったトロッコを窯から出してきて炭出しが完了いたします。今度は上から蓋が下りてきて空気を遮断するとアッという間に火が消えます。しかも窯の中は熱いままですから、生の木をその中に入れておくとアッという間に乾燥して薪になります。炭焼き小屋から、今は大企業に成長しました。炭焼きが広がるほど里山の整備が進みます。そして自然は豊かになり、この企業は儲かる。環境と経済の共鳴です。これは漫画雑誌「ビッグコミックス」の「美味しんぼ」にも取り上げられ、注目されています。

製材クズのペレットも利用します。木を粉にして固めた燃料で、ストーブ、ボイラーで油の代わりに使います。ペレットを豊岡産でつくってエネルギーの地産地消にしようと、順次、小学校、中学校の石油ストーブをペレットストーブに置き換えています。温水プールに補助ボイラーとしてペレットボイラーを入れていきます。ペレットボイラーは年中、需要があります。ストーブの方は冬しかありません。ペレット製造が経営的に成り立つ最低限の量は豊岡市が引き受ける約束をし、森林組合が今年度、製造ラインを設置いたします。森林組合は森林整備が進んで助かる、儲かる。豊岡市役所は石油の価格が上がってくると、その価格差でエネルギー代が助かります。これを広げていってエネルギーの地産地消を進めようという考えです。

コウノトリ育む農法

農業は決定的に重要です。かつてコウノトリを絶滅に追いやった、とどめを刺したのは農薬でした。もちろん人間の健康にもよくない。しかしよくないからといって、農薬はけしからんというだけでは事態は何もかわりません。日本はモンスーンアジアにあります。夏に大量の雨が降ります。梅雨です。太陽の光と水に恵まれることが光合成に必要です。日本ではアツという間に光合成が進んで草が生え、虫もわきます。日本の農業は草との闘いともいわれてきました。大変な重労働でした。農薬は草や虫を殺します。また農家から重労働を除き、収量を安定させます。農薬に農家が飛びついたのは実は極めて合理的な態度でした。

農業はだめだというのであれば、私たちは二つのことをする必要があります。一つは農薬に頼らなくても比較的簡単にお米ができる、野菜ができる技術体系をちゃんと提示をすること。もう一つは、農薬を使わないと手間がかかりますので、その製品のマーケットをきちんとつくること。その二つを豊岡はやってきました。そのうちの米づくりについての話です。

「コウノトリ育む農法」という農法が豊岡で確立されました。そのうちの虫対策です。農薬を使わないと稲にウンカがつきます。するとクモが発生してウンカを食べます。クモをカエルが食べます。カエルをヘビが食べます。カエルやヘビをコウノトリが食べます。この自然界の、食べたり、食べられたりする関係を殺虫剤におきかえていこうという農法です。それ以外に草対策とか、いろんな技術を組み合わせてコウノトリ育む農法を確立いたしました。映像をよくごらんくださ

い。カエルがカメムシを食べているのがわかりますね。農薬を使わずに自然界に任せるという一つの端的な例です。

コウノトリ育む農法による水稻の作付面積の推移です。昨年度 212ha で、着実に増えてきました。しかもお米は通常農法のお米より減農薬タイプで6割、無農薬タイプで10割高く店頭で売られています。量販店のイトーヨーカドーでは、関東圏、東京を中心に130店舗でコウノトリのお米が販売されています。この春から名古屋でも発売を開始しました。兵庫県内に店舗展開をしているトーホーストアでも、このコウノトリのお米を売っていただいています。こちらは一袋売れると1円をコウノトリ基金に寄付するという仕組みになっています。コウノトリのお米を使ったお酒もできました。姫路の本田商店がつくっている酒は4合瓶5000円、一升瓶1万円です。

もう一つ、兵庫県が安全な農法の基準をつくりました。それにあっているかどうかを確認した場合に「ひょうご安心ブランド」というシールを貼る制度をつくりました。豊岡市はそれにさらに基準を上乘せして「コウノトリの舞」という認証制度をつくりました。

野菜と米の作付面積は広がっています。コウノトリの大豆、減農薬大豆ですが確実に増えてきています。白大豆などは通常の値段の3倍の値で引き取っていただいています。コウノトリ大豆を使って納豆、豆腐がつくられています。京都駅のがんこ寿司でも、この大豆を使った豆腐を売っていただいています。

コウノトリの波及効果

コウノトリを見るためのお客さんも増えてきました。この年の秋に放鳥がなされまし

た。最近、ちょっと減り気味ですが、40万人近い人がコウノトリを見るために豊岡にきています。4分の1がリピーターだといわれています。コウノトリの郷公園の一角に店がつくられ、コウノトリのお米やグッズがおかれています。

中国から高校生が修学旅行で、大学生が環境学習で豊岡にやってきたこともあります。東京大学の招きでヨーロッパから研究者がやってきたこともあります。最近では韓国です。トキとコウノトリの放鳥の計画があり、先進地域ということで続々とやってきています。東大と国連大学のアジアの環境リーダーを育成するプログラムで豊岡をフィールドとして選んでいただいています。これらも経済効果です。

慶応大学の大沼あゆみ教授らが調査をしてくださった観光客増大による経済波及効果は毎年10億円です。40万人のうちの10万人がコウノトリ目的でこられた方々です。この4分の1の人たちは、どれくらいお金を落として、それが経済に波及するのかについて、このような数字を出していただいています。

子どもの野生復帰大作戦

コウノトリの自然放鳥が始まった時、人間は自然に帰らなくていいのかということで、それならと、「子どもの野生復帰大作戦」を始めました。世界的大冒険家、植村直己さんの故郷でもあります。冬山のトレッキングや、滝壺への飛び込み、山登り、田んぼでの泥んこ遊び、海潜り。私もやってみました。豊岡の海に潜ると早速、越前クラゲに遭遇しました。これは浜から10mもいかないところ。タツノオトシゴを浜から10m以内

のところで捕獲しました。子どもの野生復帰大作戦、「がんばれ、泥んこチルドレン」が合言葉です。

これまでのコウノトリをめぐる豊岡のさまざまな取り組みによって、豊岡の田んぼにいろいろな生き物が帰ってきました。カエルやナマズ、ドジョウ、フナが帰ってきました。それまではなかったことですが、コハクチョウもやってくるようになりました。コウノトリも帰ってきました。

しかし豊岡の水田風景の中に帰ってきたものの中で、私たちが最も誇りに思うのはこれです。子どもがまた田んぼの中に帰ってきました。帰ってきた子どもたちはいろいろ勉強しました。農家へ行ってコウノトリ育む農法を学んでいます。

コウノトリ育む農法が広がれば広がるほど、豊岡の環境はよくなって、コウノトリにとっても自然にとってもすばらしい。この農法を広げるために、子どもたちは考え、実にまっとうな結論に至りました。「消費を増やせばいい」。

どうすればお米の消費を増やすことができるのだろうかと考えたとき、学校の近くにコンビニがありました。子どもたちは自分たちの主張を紙に書いて店長さんに会いに行きました。「店長さん、売っているおにぎり、このお米でつくってくれないか。そしたら消費が増え、生産が増えて、豊岡の環境はよくなります」。

残念ながら値段や、収量の問題があったりして実現はしませんでした。しかし子どもたちは負けませんでした。学校給食で使うと、消費が増える。市長に頼もうということで、子どもたちは自分たちだけで私のアポイントをとって自分たちだけで私のもとにやってきました。これには驚きました。子どもた

ちの論理の確かさと、行動力。

私は約束をしました。6割ほど高いお米ですから簡単には使うことはできません。学校給食費を上げることはとても難しい。当時、豊岡市は週5日の給食のうち4日間は地元産のコシヒカリを使っていました。もう1日はパンでした。4日間のコシヒカリのうち2カ月に3回なら何とかやりくりすれば学校給食費を上げずに済むことがわかりましたので、子どもたちがやってきた年の秋から2カ月に3回の割合で、このお米を使い始めました。ところが昨年1月、私たちは予算の議論をしていました。毎年、コウノトリのために2000万円近い寄付をいただきます。100円くださる方、10万円くださる方、いろいろなものに使っていますが、この子どもたちのことを思い出しました。そうだ、その差額に当てよう。

昨年4月から週5日、最後の1日のパンをやめ、コウノトリのお米にしました。今、豊岡は5日ともすべて地元産の米で、そのうちの1日はコウノトリのお米です。これによってご飯茶碗3～4万杯、水田面積にして7ha、1年間で作付面積を増やした計算になります。

子どもたちは自分たちでもコウノトリ育む農法をしたいということで、無農薬に挑戦しました。水田魚道をつくりたくても60万～70万円して、とても手が出ない。そこで、子どもたちは森林組合に相談に行きました。森林組合は驚いて「いいよ、材料ならタダでやる、持っていきな」。そしてちゃんと水田魚道ができました。今年、その水田魚道を使って上がってきたナマズが子どもたちの田んぼで産卵しています。そして苗床もつくり、お米ができました。

今や子どもたちは環境経済を学んでいま

す。つくったお米は売らなければならない。町の真ん中に青空市場があります。場所代を払って、自分がつくった米や野菜、とってきた魚を売る場所ですが、そこを使いたいと申し出ました。管理人さんは驚いて「いいよ、君たらならタダで貸してあげる」。しかも子どもたちは大変にしたたかでありまして、記者発表をしておりました。朝になって近所のおばさんたちが来るとテレビカメラが並んでいて、カメラマンがいる。「どうしたの?」といってアッという間にお米は売り切れました。

子どもたちだけではありません。この方は、平成19（2007）年、87歳で250万円のトラクターを買っておられ、もっと育む農法を頑張るんだといって、昨年、89歳で600万円の大型コンバインを購入されました。とても経済的に合理的な行動とは言えません。物理的に残された時間からいえば、とても回収できない。でも、この方の人生にとってはものすごく意味があるのだと思います。自分の農業に対して未来を信じている。やり甲斐がある。とするとコウノトリ育む農法がもたらしたものは、農業者に対する経済的な利益だけではなく、実は自分の人生に対する誇りであったり、希望であったのではないかと思います。

命への共感

50年前の1960年、豊岡市で撮られた写真です。出石川の農家の女性で、今、100歳、ご健在です。7頭の但馬牛、12羽のコウノトリも写っていますが、このような近い距離で暮らしていました。17、18年前、この写真を使って大きなポスターをつくりました。それに「35年前、みんなで暮らしていた」と

という言葉添えました。同時に「私たちは人間の努力を信じます」という言葉を添えました。このポスターをつくった時、あそこのおばあちゃんらしい、ということになって、市職員と新聞記者がインタビューに行きました。ところがこの女性は「そんな、30何年も前の写真、しかも後ろ姿だ。自分かどうかわからない。だけれども、この牛はうちの牛だ」。

一つの家の中で仲良く暮らしていた時代がありました。そしてこの女性はコウノトリのことはほとんど話をされずに、ひたすら牛の話をして、最後に、こう言われたんだそうです。「あの頃は心が本当に豊かでした」。私たちが何を失ってきたのか、何を取り戻そうしているのか。この写真が象徴的に示しているように思います。

冒頭にごらんいただいた恐ろしい水害の写真と同時に、私たちはどのように自然と共生できるのか。その問いを突きつけているように思います。豊岡は豊岡の答えを追い求めてまいります。皆さんは皆さんの答えを出していただきたいと思います。

2008年10月の円山川本流です。国土交通省がつくった湿地にコウノトリ15羽が降り立ってくれました。実は野性で絶滅した動物を人間が人工的に増やして行って、もう一度野に帰したという先行例は世界にいくつかありますが、人里の中に帰した例は世界で初めてで、佐渡のトキが今、2例目を追いかけてきています。

昨年10月、豊岡市内の円山川に18羽降り立ちました。たくさん落ちアユが集まっています。それを求めてコウノトリとサギとカワウとトンビとカラスと人間が獲物を取りあっているという光景が、実現をいたしました。

生物多様性条約という条約があります。生き物がお互いにつながり合って生きている状況、それを生物多様性といいます。それが危機に瀕しているのを守ろうという条約です。今年COP10が名古屋で開かれます。事務局はカナダにありますが、事務局長を今年2月、豊岡にお招きしたところ、彼はびっくりして帰っていきました。この条約の事務局のホームページには世界の先進的な取り組みの8カ国の一つとして豊岡が紹介されています。

礼状が届き、その中には「豊岡モデルは国際社会の注目に値します。については今年9月、国連総会の高級閣僚会議に配りたいので冊子の中に豊岡のことを書いてほしい」と書かれていました。同時に今年10月、名古屋のCOP10が開催されます。1万人くらい来ます。そこで配る。ようやくコウノトリの取り組み自体が国際的な認知度を得つつあるところまでやってまいりました。2007年5月に生まれ、7月に46年ぶりに育ったコウノトリの誕生から巣立ちまで約3分間の映像をごらんください。

(ビデオ)

懸命に生きようとする命、懸命に守ろうとする命、人間とコウノトリと姿、形は違いますが、あのコウノトリの親子の姿は私たち人間の家族の姿でもあります。豊岡をコウノトリ野性復帰に向けて突き動かしてきたもの、それは命への共感だと思います。今年度、豊岡市は「命への共感」をまちづくりの基礎に据えたいと思い、1年かけて命への共感に向けたまちづくり条例をつくらうと思っています。

ご清聴ありがとうございました。

[質疑]

見えないものをいかに見せるか

司会 ありがとうございます。すばらしい講義をいただきました。コウノトリが目の前に舞い降りてきたという印象を持っています。質問がございましたら。

質問 豊岡での取り組みがいきいきと伝わってきて感動しました。「命への共感」ということで、そこに住んでいる方々が、コウノトリや田んぼの生き物をみながら生きていく様子を感じ、自然の再生、子どもたちの学習に取り組んでおられるのだなと思いました。

市としての取り組み、施策、環境経済戦略ということで、自然を生かした産業、自然に価値を見だして認めていく、今ある資源を引き出していく、束ねていく産業を支援しているということですが、さらにもう一歩、踏み出して、潜在的な自然の資源、人の資源、豊岡の文化的な資源を引き出して地域の経済を強めていく、高めていくアイデア、戦略をお聞きしたいと思います。

中貝 どこから手をつけるか、ということですが、豊岡市内の企業が環境経済の方へ動いていくことがてっとり早い。それが広がっていけば、外から環境経済にとって刺激的な町だということをやってくることも考えられると思います。てっとり早いのはそこにいる企業を環境経済型に変えていく。環境経済型の技術を開発する。商業を開発するということですから、ここの働きかけをしています。

私の話を聴いていただくと豊岡市全部が燃え上がっているように聞こえるのですが、そんなことはありませんで、多くの人々はやっぱり無関心です。いわんや経済と環境が結

びつくなんてことは本気で思っている人は、そんなにいるわけではありませんので、こういう具体例を見せながら、「こんな感じなんですよ」と一生懸命、豊岡の人たちに訴えていく。先行事例の人たちのことを発表して聴いてもらう。できたものをできる限り記者発表し、ホームページに出して、褒めたたえていく。豊岡の人たちの意識を変えるという作業をしています。

しかしコウノトリとの共生について豊岡の意識は完全に変わりました。かつては「コウノトリは害鳥だ、あんなものに金をかけて、どうするんや」「うちの市長はあんなことばかりやっていて、コウノトリ市長だ」と揶揄をこめていわれていたのですが、これはかなり減りました。

しかし、まだ経済との関係については、ほとんど半信半疑ですので、そこに具体例を見せて鼓舞していくという、そこが今、豊岡がやっている、次のステップとして必要なことだと考えています。一方で補助制度を設けていまして、肩を押す程度の補助金ですが、審査をして、補助金を差し上げる。あるいは研究者の手助けが必要だという場合には、県立大学、神戸大学、県の工業試験所と結び付けて研究者の力を借りながら開発をやっていることをしています。

廃タイヤは豊岡の中では需要がありませんので、国土交通省に話をして国交省の「推奨技術」のデータベースにさせていただいて、それを見つけて大阪府がやってきたわけです。

豊岡市としては褒めたたえること、その気にさせること、売り込むこと、お米も相当、売り込んでいるのはJAが中心ですが、豊岡市の職員もイトーヨーカドーの店頭に立ってお米を売っています。

具体例を見ないと、人間はなかなか信じることはできません。目に見えないものを見ることは、とても難しく、何か先端的なことをやろうとする時には何人かの人間には見えるのですが、他の人は全く見えない。やるべきことは、見えない人たちにいかに見えるようにしていくかです。一つひとつ具体的に目の前の一步で見ることをやってみる。少しできるんだねと、それを見た人が、それなら信じるができるって入ってくる。農業は変わり、人々の意識が変わってきたわけですが、環境経済も、それと同じことが次のステップとしているのではないかと思っています。

少数でも牽引力をもった組織

質問 コウノトリというとテレビでよく拝見するんですが、ここまで仕上げ取り組んでいらっしゃることに大変驚きました。市役所の職員数や、コウノトリの担当部署があるのかどうか、役所の組織について教えてください。

中貝 正規職員は消防を入れて約1000人です。それ以外に嘱託とか臨時職員を入れると約1500人です。その中でコウノトリの担当はコウノトリ共生課に課長以下10人くらいだと思います。専門家はやっと4月に採用しました。環境のまちづくり専門員として大学院卒を募集しました。生物保全担当ですが、48倍の倍率をかいぐって大変コミュニケーション能力のある職員がきましたが、普通の人事異動で手を挙げたものもいます。

組織としては、コウノトリ共生部があります。環境政策と農業政策の融合をはかる必要があるということで、もともと農林水産部と、企画部の中にコウノトリ共生課があった

のですが、コウノトリ共生課と農林水産関係を一つにしてコウノトリ共生部にしました。これは部ですから、普通の農業政策をやっているものもありますが、環境農業係を設けて、3人くらいいたと思います。コウノトリ育む農法を広げることをやっています。コウノトリ文化館、ここに専任職員が3人、あとは嘱託です。

ただしコウノトリ共生部をつくる時、あやうく条例が否決されそうになりました。賛成してくれたのは自民党系の人だけでした。農林水産に対する冒涇だと。そうではなく、日本の農林水産業は全くうまくいっていない。豊岡の中でもうまくいっているのはコウノトリにかかわるところではないか。かつてIC産業がもてはやされた時、産業規模が8000～9000億。けども力があつたから、今、ICは日本を引っ張っている。

同じようにコウノトリ育む農法は豊岡の農業全体から見ると、わずかですが、ここに力がある。これを推進力にして豊岡全体の農林水産業を元気にするんだとあって、辛うじて条例が通り、コウノトリ共生部ができました。できたたん、新幹線の電光掲示板に豊岡コウノトリ共生部決定と出たそうです。大変うれしく思いました。

環境教育を支えるNPO

質問 一つはカエルのこと、もう一つは子どもの目の輝きなんです。トノサマガエルがいっぱいて、というのが印象的で、私のところではトノサマガエルは息も絶え絶え、ほとんど見つからないという状況です。それは3年米の田んぼにして、水を干してしまうことが大きいと思うのですが、水田のつくり方が変わったことにあると思います。冬も田ん

ぼに水を張っている。冬水田んぼが、どのくらい豊岡にあるのか。それから子どもが積極的なのが印象的で、教育の点で、環境教育や教員の方々と連携してやっておられると思いますが、その点について。

中貝 冬水田んぼは今、71ha あります。生き物を増やすことは、一つはビオトープ水田で1年中水を張って草の管理をする。そうするといろんな生き物が増えてきます。コウノトリ育む農法自体が、特に農薬を使いませんので、ここがかなり生き物を増やします。冬に水を張ることによってアカガエルを増やす。中干しを1カ月遅らせることによってトノサマガエルを増やす。それ以外にもいろんなことをやっています。田んぼの中に1カ所だけ深い場所をつくる。他のところは普通の深さにして、田んぼから水がなくなっても避難場所、シェルターがありますので、そこで魚、カエルやいろんな生き物が生き残るということも始めています。それをやると、サギにやられますので、その上に板を乗せて、何か所か退避所をつくったり、水田魚道を広げてきました。そういう努力を積み重ねてきているということですね。

子どもの教育は環境教育もかなり早くから意識していましたが、ポイントは先生なんですね。学校の先生に関心がないので、先生自体の教育から始めないといけないことがありまして平行してやっています。

同時に豊岡の5月20日、日本の野外で43年ぶりに雛が孵った記念すべき日ですが、豊岡はそれを「生き物共生の日」と告示をし、5月20日、生き物共生の日前後に各学校は生き物の授業、生き物調査や、フィールド調査をしなければいけないとしました。そこにNPOの人たちや、訓練を受けた先生たちがかかわり、田んぼの中に入って生き物調査を

やったりしています。今、順次、各学校でビオトープ水田をつくっており、10校まで増えてきていると思います。小学校は30ありますので、全部でやりたいんです。費用は寄付の一部をあてて、農家の理解を得た上で学校のすぐ近くにビオトープ水田をつくって、その中で泥んこ遊びをさせて、ちゃんとこの田んぼにどういう生き物がいるか、ポイントに1㎡の場所を選んで、徹底的に生き物を調べて、数と種類を、それで平均値をとって、この田んぼにドジョウが何匹いたとか。子どもたちにさせるようなこともやっています。

「子ども野性復帰大作戦」については、200人程度の子どもの募集して1年間、今月は田んぼの中で泥んこになって生き物を調べる日、今月は海に潜る日、今月は川で泳ぐ日、今月はごみを拾う日とかやって、かなり人気でした。バリバリにやりたい子どもたちが集まっています。そこにちゃんと教えるスタッフがいるので、子どもたちの先端部分が育ってきているなど思っています。

質問 メダカは戻ってきましたか。

中貝 全くいないというわけではなくて、少し戻ってきているのではないかと思います。

福祉としての意義

質問 京都市役所北福祉事務所で障害児福祉をやっています。自分の人生に対する誇り、命への共感ということで、福祉にも通じるお話を聴かせていただきました。ノーマライゼーションの一つ、インクルージョンという考え方に通じるようなことを、コウノトリを切り口にしてやっておられるなど思いました。豊岡市の社会福祉の現状とコウノトリを生かした形で社会福祉、生涯福祉、高齢福祉とか、農業で積極的に生き甲斐をもってお

られるという話を伺いましたが、高齢福祉についてどのように展開されているのでしょうか。

中貝 社会福祉の現状というと大変な問題ですが、そんなに突出したものがあるわけではありません。ただ農業との関係でいくと、NPOができて、農作業で障害者や、外に出にくい気持ちを持っている人たちの社会参加をすることが始まったりしています。古い学校を使って、ニートの人たちの社会参加をする。中心は農業体験ですが、そういうことも始まっています。

作業所にはコウノトリをダシにして儲けろと促しています。たとえばコウノトリの箸置きをつくっていますが、大変な売れ筋でありまして、東京に持って行って、これを使いませんかと売り込んだりして、結構、売れています。コウノトリのコウちゃんカステラをある作業所がつくりました。障害者の人たちがつくったものだから応援してあげようという買うのではなかなか続かないし、本人たちの誇りという面でも十分ではない面があって、商品としてちゃんと成り立つ、商売できるような箸置きとか、コウノトリの形をしたカステラができてすごく売れると、自分たちはちゃんと商売ができているということが誇りにつながることが見えてきていますので、これはさらに広げていきたいと思っています。

高齢者についても役割を持つことは大切だといわれています。人間の健康を支えるのは、運動、栄養、休養と言われていますが、それに社会参加が言われるようになりました。社会的役割を果たす、他者への期待に対して応えることではないかと思っています。高齢者に対して社会的な役割を果たしていただく機会を増やすことは極めて重要なこ

とだと思っています。農業はそれを提供できる有力な分野だと思います。子どもが襲われた事件があったりしたので、兵庫県では県の音頭取りで豊岡はすべての小学校区に高齢者の見守り隊ができています。登下校時に、ボランティアの年配の方がジャンパーを着て、子どもたちに横断歩道で注意を喚起すると、子どもたちは「おっちゃん、おはよう」とか言って。これもおそらく生き甲斐に通じて社会参加に通じて健康につながっているのではないかと思います。

豊岡の隣町に兵庫県の但馬長寿の郷があります。ここから聞いた話で、大分前に脳卒中で倒れた男性が、命は助かって右側にマヒが残っている。身体機能は大丈夫だと。ところかだんだん外に出なくなった。布団の中にいたきり。

長寿の郷のプロジェクト・チーム（PT）たちが地域リハに中に入っていきます。病院にリハビリに来る人たちは、治したいと思っている、回復したいと思っている人ですから、ここは問題ありません。ところが家庭の中にいる人は、「ほっといてくれ」と。人生に何も望むものはないという人に機能訓練をさせることはとても難しいことです。ここに技がいる。PTの人はその人と話をしているうちに、その男性が50年来、牛を飼っていたことを知ります。「牛を見に行きませんか？」と声をかけると、思わぬことに、その男性が「行く」と。車椅子に乗って200mの山道を車椅子に押されて牛小屋に到着する。その男性はよるよると立ち上がって牛に近づいて行って、もう捨ててしまいたいと思っていた震える右手で牛の頭を撫でたんだそうです。そこから牛小屋に行くようになって生活がガラッと変わったということです。

牛が、その人を待っていたということでは

ないかと思うんですね。牛に対して自分は責任を持っている。役割がある。そういうことを果たさないといけないと思った時に、それが、その人の生きる力になったのではないかと考えていまして、まだトピックス的な話しかできませんが、高齢者の福祉を考える時に、その地域がどれだけ高齢者に役割を提供できるか。高齢者が役割を果たそうとすることは大切なことだと思っています。その意味では農業をやっている人たちは、自分はちゃんとコウノトリの住めるまちづくりに頑張っているということは大きなことになっているのではないかと思います。

何が行政の厚い壁を越えさせたか

質問 NPO 法人の事務局長をしています。今日の話は感激ということではなく、泣きました。こういう話があったんだ、こういうまちづくりをされている人がいらっしやると。まちづくりのお手伝い、環境教育の支援などをしていますが、壁になるのは、円山川の改修の話でもそうですが、ここから先は国土交通省、県の所管と、守備範囲でできないところがあって、アユが遡上するまちをテーマに上げたんですが、その川は県までしかさわれない。アユは入れないでくれと。市の範囲を越える部分で県と、国の協力をどのように引き出されたのでしょうか。

中貝 大切な部分だと思います。そそのかす、その気にさせる。言葉を磨く必要がありますし、情熱でぶつかる必要があります。豊岡に来ると、国土交通省の役人も県の役人も人間ですから、夢を本気で実現しようとする人たちがいる時には、なんとかしてあげようと思うことがしばしばあります。

実は、コウノトリは兵庫県が管理をしてい

ます。法律上、コウノトリは天然記念物にさせていただいていましたが、コウノトリについて何のアイデアも持っていませんでした。しかし、県の教育委員会が管轄で飼育を委託されていた豊岡市にとっては自分たちの鳥でしたので、コウノトリも住める町をつくりたいという強い思いがあって、県に野性復帰を働きかけました。野性復帰の事業自体は、県がやっていますが、それは豊岡から提案したものです。知事、教育長、いろんな人たちに、いろんな手練手管を使って野性復帰を促して実施することになりました。

国土交通省、県の土木事務所に対しても、絶えず語りかけていく。そのことによって彼らもホロツときて、「それならば」と、変わってきました。十何万 ha の河川敷内の田んぼを買うのも一発でした。それまでに長いやりとりがあって、国交省はだんだんその気になって、つくり始める。その延長で土地を買って、そこは湿地に戻ってしまう、となったのです。いきなりではなかなか動かなかったと思います。小さなことでもいいですが、はじめから縦割りだからということで諦めずに、ぶつかり続けていくことがいいのではないかと思います。

実は結構、川をやっている人は自然をよく知っています。イメージでは石頭で、川をコンクリートで固めたいと思っているように思いますが、実は彼らは川のことはよく見えていますから、自然のこともよく知っている人たちです。そこにうまく話を持っていく、ということも積み重ねて、国交省が仲間に入ってきたと思います。環境省も仲間に入りませんか、ということで、豊岡の状況はある意味、幸運でもありましたが、夢は豊岡が描いている。豊岡市役所というわけではありません。豊岡という場の中にいる多くの人々や組

織です。市役所も、市民も、農業者も、研究者もそうです。豊岡というものに夢を描いていて、国土交通省が豊岡に入ってくるのであれば、あなたもコウノトリの一員になってほしい、国交省はコウノトリの一員として、自分がどこに貢献できるかを考えて湿地再生をやっていく。農水省にも同じことを求める。中央の夢を豊岡で実現するのではなく、夢は、あくまでそこに住む人にとって、その夢を実現するために、いろんな人たちの協力を得ていくという、得ていくためには私たち

には言葉と情熱しかありませんので、言葉と情熱でうち崩していくことかな、と思います。偉そうなことをいっていますが、いつも、うまくいくわけではないんです。

司会 どうもありがとうございました。最後まで感動的なお話でした。時間がきましたので、中貝市長の講演は、ここで終わりたいと思います。最後に、もう一度拍手で感謝を表したいと思います。

[2010年6月12日]